

この略年表は、『ガエターノ・ドニゼッティ〜ロマン派音楽家の生涯と作品』（グリエルモ・バルブラン/ブルーノ・ザノリーニ著、高橋和恵対訳、昭和音楽大学発行、ショパン社発売）の、高橋和恵氏による巻末付録をもとにしています。

1797年	11月29日、ドメニコ・ガエターノ・マリーア・ドニゼッティは、北部イタリアのベルガモに生まれる。 父アンドレーア、母ドメニカ・ナーヴァ。 ベルガモ共和国、チザルピーナ共和国に併合される。
1801年（4歳）	ヴィンチェンツォ・ベツリーニ生まれる。
1806年（9歳）	ベルガモに創設された慈善音楽学校に仮入学。その校長、ドニゼッティの生涯の師・ジョヴァンニ・シモーネ・マイルと出会う。
1813年（16歳）	ジュゼッペ・ヴェルディ生まれる。
1815年（18歳）	10月、マッテーイ神父のもとで勉強するために、ポローニャに向けて発つ。 マッテーイ神父のもとで対位法を学びながら、主に宗教曲を作曲。
1816年（19歳）	初めてのオペラ《ピグマリーネ》を作曲。 ロッシーニが《セヴィーリアの理髪師》を作曲、ローマで初演。
1818年（21歳）	11月14日、ヴェネツィアのサン・ルーカ劇場にて《ブルゴーニュのエンリーコ》が上演され、オペラ作曲家として劇場界入りする。
1819年（22歳）	《ピエトロ大帝》を作曲、12月26日、ヴェネツィアのサン・サミュエル劇場で初演される。
1821年（24歳）	この2年のあいだは、宗教曲もしくは室内楽曲を多く作曲。 10月のはじめ、ローマに発つ。台本作家ヤコポ・フェツレツティと出会う。
1822年（25歳）	《グラナダのゾライデ》がローマのアルジェンティーナ劇場で大喝采を浴びる。ナポリでは《ジプシー女》が28回も再演が続く大成功を収める。しかし、待望のスカラ座で《キアーラとセラフィーナ》がひどい失敗に終わる。
1824年（27歳）	フェツレツティの台本によるオペラ・ブッフア《当惑した家庭教師》をローマのヴァッレ劇場で初演、諸外国を含む各地で上演される。
1827年（30歳）	ナポリで興行主ドメニコ・バルバイア、台本作家ドメニコ・ジラルドーニと出会う。《8カ月を2時間で》が大成功を収める（ヌオーヴォ劇場）。 ジラルドーニの台本による《ローマの追放者》が、ナポリのサン・カルロ劇場で絶賛される。
1828年（31歳）	ジェノヴァにオープンしたカルロ・フェリーチェ劇場に招かれ、ローマ台本の《ゴルゴンドラの女王》を初演。 6月1日、ヴィルジーニャ・ヴァッセルリと結婚、ローマを後にし、二人でナポリに居を構える。
1829年（32歳）	2本のオペラ・セーリア《賤民》《ケニルワース城のエリザベッタ》をナポリのサン・カルロ劇場で初演。ナポリの王立劇場の音楽監督に任命される。 ヴィルジーニャが早産し、一人目の子供を失う。
1830年（33歳）	ミラノのカルカノ劇場で《アンナ・ボレーナ》を初演、センセーショナルな成功を収める。この作品をもってロッシーニの模倣時代から完全に離脱。個性の認識。

1831年 (34歳)	<p>同じカルカノ劇場で、ベッリーニも《夢遊病の女》を発表。</p> <p>イタリアの各地でコレラが蔓延、ローマの劇場が封鎖される。その間、《パリのジャンニ》を作曲（初演 1839年、スカラ座）。</p> <p>スカラ座でベッリーニが《ノルマ》を初演、センセーショナルな成功を収める。</p>
1832年 (35歳)	<p>ナポリのサン・カルロ劇場で《ファウスタ》を初演した後、ミラノへ向かう。ミラノのカノッピアーナ劇場では、不滅の秀作《愛の妙薬》が大喝采を浴びる。ロマン主義の軌道を定着。</p> <p>ふたたびナポリに戻り、サン・カルロ劇場で《カスティーリアのサンチャ》を大成功させる。</p>
1833年 (36歳)	<p>ローマのヴァッレ劇場で《サン・ドミンゴ島の狂人》を上演。6年の間に全ヨーロッパの70以上の劇場で上演されるほどの大成功を収める。</p> <p>フィレンツェで《パリスィーナ》を上演。この作品で第二の飛躍を遂げる。</p> <p>スカラ座の開幕で《ルクレツィア・ボルジア》を初演。ドニゼッティのスタイルの確立。</p> <p>ナポリの王立音楽院の教授に任命される。</p>
1834年 (37歳)	<p>《マリア・ストウアルダ》が、検閲との問題から《ブオンデルモンテ》というタイトルで上演される（ナポリのサン・カルロ劇場）。</p>
1835年 (38歳)	<p>初めてパリへ。1月24日、パリのイタリア歌劇場でベッリーニの《清教徒》が初演され、成功を収める。</p> <p>ナポリに戻り、サン・カルロ劇場で傑作《ランメルムールのルチア》を発表。</p> <p>9月23日、ヴィンチェンツォ・ベッリーニ逝去。《鎮魂ミサ曲》、歌とピアノのための《ベッリーニの死への追悼歌》を作曲。</p> <p>父アンドレーア亡くなる。</p>
1836年 (39歳)	<p>《ベリザリオ》をヴェネツィアのフェニーチェ劇場で上演、絶大な成功を収める。</p> <p>母ドメーニカ・ナーヴァの逝去。</p> <p>レジオン・ドヌール勲章受章。</p> <p>コレラの蔓延のため、ナポリの劇場が閉鎖される。その間、歌曲集《ボジリボの夏の夜》、《弦楽四重奏曲 ホ短調》、ファルサ《呼び鈴》および《ベトリー》、《カレーの包囲》を作曲。</p>
1837年 (40歳)	<p>二人目の子供に続いて三人目の子供もすぐに亡くなり、妻ヴィルジーニャも他界。</p> <p>コレラの再発。</p> <p>《ロベルト・デヴリュエ》がサン・カルロ劇場で上演され、その後、50もの劇場で再演されるほどの成功を収める。</p>
1838年 (41歳)	<p>テノール、アドルフ・ヌリとの出会い。《ポリウート》を作曲するが検閲問題で上演禁止となる（1848年遺作初演、ナポリのサン・カルロ劇場）。</p> <p>イタリアを離れ、パリへ移る。</p>
1839年 (42歳)	<p>《アルバ公爵》の作曲に入るが、未完成のまま終わる（マッテオ・サルヴィーニによって完成され、1882年遺作上演）。</p>

1840年(43歳)	<p>《連隊の娘》がパリのオペラ・コミック座で初演。フランス風コミック・オペラのスタイルで作曲。</p> <p>《殉教者》(グランドオペラに仕立て直した《ポリウト》のフランス語改定版)がパリのオペラ座で上演され、成功を収める。ロマン派的叙情主義とフランス的嗜好を調和させた大作《ラ・ファヴォリータ》(《ニズィダの天使》の改作)を初演(パリ、オペラ座)。</p> <p>12月、ローマへ向かう。</p>
1841年(44歳)	<p>《アデーリア》を上演後、ふたたびパリに戻る。《ベリザーリオ》《ルクレツィア・ボルジア》をフランス用に改作。</p> <p>歌曲集《昼の集い》をイギリスのヴィクトリア女王に献上。</p> <p>《ミゼレーレ》を献上したことで、法王から騎士の称号を授かる。</p> <p>師マイルの78歳の誕生日を祝い、《カンタータ》を作曲。</p> <p>《リータ》を作曲(1860年遺作初演、オペラ・コミック座)。</p> <p>ドメーニコ・バルバイア逝去。</p> <p>12月26日、《マリア・パディーリャ》をミラノのスカラ座で初演。</p>
1842年(45歳)	<p>《シャムニーのリンダ》を作曲。</p> <p>スカラ座で、ヴェルディが《ナブッコ》を初演、立ち会う。</p> <p>ボローニャでロッシーニの《スタバト・マーテル》の初演を指揮。ロッシーニからボローニャの音楽院の学長就任の要請があるが断り、ウィーンに向かう。</p> <p>ケルトネルトル劇場にて《シャムニーのリンダ》が大成功を収める。</p> <p>6月、宮廷楽師長に任命される。</p> <p>7月、ミラノを経由して、ジェノヴァから船でナポリの家に帰る。シュテルリッヒ公爵家との出会い。そしてパリへと移動する。</p>
1843年(46歳)	<p>1月、パリのイタリア歌劇場で《ドン・パスクワーレ》を上演、ヴェルディの《ファルスタフ》に繋がるドラム・ブッフオを確立。</p> <p>《ローアのマリア》がウィーンのケルトネルトル劇場で大喝采を浴びる。</p> <p>11月、パリで《ドン・セバステイアン》を初演、爆発的な熱狂を呼ぶ。</p> <p>12月、ふたたびウィーンへ戻る。</p>
1844年(47歳)	<p>頻繁に病気の兆候が現れるようになる。</p>
1845年(48歳)	<p>7月、ウィーンを離れ、パリへ発つ。</p> <p>12月、師マイルが亡くなる。</p>
1846年(49歳)	<p>2月、フランスのパリ近郊、イヴリーの精神病院へ入れられる。</p>
1847年(50歳)	<p>9月、病院を出て、10月故郷のベルガモに戻る。</p>
1848年(51歳)	<p>4月8日、逝去。</p>